



きんもくせい（金木屋）のほのかに甘い香りが漂い、紅葉の兆しも見えて、秋は日々深まってきました。あちこちの庭や公園には萩の花も咲いています。地球研の中庭の池の傍にもきれいな赤紫の花が、一杯咲いていますね。長い枝を垂れて群生し、枝の先には、赤紫や白の小さい花が咲く姿は、時に女性の姿になぞらえて、万葉の時代から日本人に親しまれてきました。遠くから群落を見てもいいし、枝一つ一つを観察しても、緑の小さな葉と可憐な花が相互に絡み合っって独特の美を形成しています。

<秋風は涼しくなりぬ馬並（な）めていざ野に行かな、萩の花見に> 作者不詳

<草枕旅ゆく人も行き触ればにほひぬべくも咲ける萩かも> 笠金村(かさのかなむら)

万葉集で謳われた花でもっとも多いのが萩で、何と 142 首にも及ぶとのこと。 (2 番目が梅で 112 首とか。) 江戸時代に始まった俳句でも、萩は題材として季語として多く詠まれています。

<ひとつ家に遊女も寝たり萩と月> 松尾芭蕉

<足もとの秋の朧（おぼろ）や萩の花> 与謝蕪村

ただ、現在の山里や市街地には、萩はそれほど多く自生していません。万葉から江戸に至る歴史時代には、なぜ、萩の花は和歌や俳句に多く詠まれたのでしょうか。そのカギは、萩が森林を切り開いた後にまず生えてくる「パイオニア植物」であることにあるようです。我が家の近くの公園にはケヤキの大木が生茂っていましたが、数年前の夏、落雷で倒れ、伐採されてしまいました。先日、気が付いたら、伐採跡に萩の群落が現れていました。

日本列島の歴史は、森を切り開いて農耕地を拡大していく歴史でもあったわけですが、その営みは社会が比較的安定した時代を中心に続いてきました。万葉集は飛鳥時代末期から奈良時代前半に至る時代に編纂されましたが、この時代には、律令制度の下、墾田永世私財法などにより、新たな農地開拓が天皇により積極的に進められました。江戸時代も、各藩での農業振興のため新田開発が活発に行われました。このような時期、森林から田畑への開墾の過程でできた原野にはまず、パイオニア植物としての萩が生い茂り、人々は今よりもはるかに身近な存在として萩に接していたのではないのでしょうか。

ちなみに、「秋の七草」を選んだのは山上憶良ですが、「萩、薄（すすき）、桔梗（ききょう）、撫子（なでしこ）、葛（くず）、藤袴（ふじばかま）、女郎花（おみなえし）」の順で挙げており、万葉の時代、萩が最も多く、次に薄が多かったことを示唆しています。ただ、薄は気候や土壌の条件などで、もともと森林の再生が難しい場所に拡がって安定な草原を形成する傾向があるようです。萩と薄の生態のちがいは、植物生態学の方にさらに聞きたいところです。<薄見つ萩やなからんこのほとり> 与謝蕪村（すすきが見つかったが、このあたり、萩はないのだろうか）

私たちが慣れ親しんでいる「(生き物の) 自然」は、気候変化などに加え、人間活動と生態系の相互作用によっても大きく変化してきましたが、そのような「変わりゆく自然」そのものも楽しむ文化を、私たちの先代たちは作ってきたともいえます。